

語彙研究

ミミ日本語の単語の諸性質と語彙の教育ミミ

同志社大学文学部教授

玉村 文郎

1. 語彙の本質

単語 (words) とその集まりである 語彙 (vocabulary) について研究するのが語彙論です。語彙は、音韻・文法 (形態・構文)・文字などと並んで、言語の構造を形づくっています。言語構造の諸分野の中で、語彙がそなえている最も著しい性質は、語彙の成分である単語が、どの言語でも数えられないほど多いという事実です。この語数の多さは、次のような性質とつながっています。

- 1 多くの語は言いかえができる
- 2 語は増える性質がある
- 3 語は増やすことができる
- 4 成人話者すべてが知っている語とそうでない語とがある
- 5 語の使用率や使用範囲には差がある
- 6 語には意味の一致・不一致や用法・語感の差がある
- 7 語の造り方・増やし方には一定の方式がある
- 8 日本語の単語には出自別 (語種) の違いがあり、それが語感・位相・表記などと深く結びついている
- 9 だれもが知っていて、よく使う語は、基本的なもので、値うちがある
- 10 異言語間 (同一言語内の地方語間) には、ふつう意味・語感の差があるので、注意する必要があるなどです。これらは相互に関連しています。以上のうち、重要なものについて考えましょう。

2. 語の成り立ちと意味

「花見」という語は、「花」と「見る」からできていて、「桜の花を見て楽しむこと」を意味します。「高さ」という語は「高い」の語幹と接尾辞「さ」でできていて「高い程度」を意味します。「花見」「聞き落とす」などは、独立の語と語の結合なので 複合語 と呼ばれます。「高さ」「春めく」「おしろい」などは、独立の語の前後に接頭辞か接尾辞がついたものなので 派生語 と呼ばれます。語の

成り立ちでは、この2種が代表格ですが、日本語には「人びと」「高だか」のような重複形 (畳語) が多いのが特色です。擬音語 (ざわざわ)・擬態語 (ぺこぺこ) が多いことも日本語語彙の特色とされますが、これに畳語が多いというのも興味深いことです。

「牛肉の入っているうどん」はふつう「肉うどん」と言います。しかし「きつねうどん」はキツネの肉が入っているうどんではありません。外国の人が勘違いをして目を丸くすることがあります。この場合の「きつね」はキツネの好物である油揚げのことです。語の構成が似ていても、意味上の構造が全く違うものがあるので、注意が必要です。「雨降り」も「さるすべり」も主語プラス述語で成り立っている複合語です。しかし、後者は「サルが遊ぶ滑り台」ではなく、植物の一種です。日本人の見立て・連想が働いて生まれた語です。こういう例を数多く集めて考えると、いろいろな面白いことが分かってきます。

しかし、基本は、比喩や連想の働いていない、又省略などのない「花見」「肉うどん」「雨降り」「聞き落とす」の類で、初級・中級で教える語もこの類に限るべきであり、語の成り立ちについて教える際も、分かりやすい基本タイプを主にすべきでしょう。

3. 単語の数

現行の小型の国語辞典の見出し語の数は、大体6～7万語ですが、日本人の成人が理解できる語は5万語ぐらいと考えられます。英日とか日中とかの対訳辞典は1～3万の見出し語のものがふつうです。表に示したように、日本人は多くの語を使う傾向があるようです。

表は語彙調査に基づいて、使用率順に並べられた語のうち、上位1,000語から5,000語までの語が各層ごとに、一般的な文章・放送の中の異なり語数の何パーセントを占めるかを表したもので、表中の数値をカバー率と呼びます (調査主体・言語構造が異なるため、数値は絶対視でき



表 語数とカバー率

語数 (1語)	英語	フランス語	スペイン語	ドイツ語	ロシア語	中国語	朝鮮語	日本語
1~500				51.2 62.83	57.5	63.1	66.4	51.5
1~1,000	80.5	83.5	81.0	1,022 69.20	67.46	73.0	73.9	60.5
1~2,000	86.6	89.4	86.6	2,017 75.52	80.00	82.2	81.2	70.0
1~3,000	90.0	92.8	89.5	3,295 80.00	85.00	86.8	85.0	75.3
1~4,000	92.2	94.7	91.3		87.5	89.7	87.5	1~3,500 (77.3)
1~5,000	93.5	96.0	92.5	4,691 83.13	92.0	91.7	89.3	81.7
計	93.5%	96.0%	92.5%		92.0%	91.7%	89.3%	81.7%

玉村文郎 (1989) 『日本語の語彙・意味』a アルク

ませんが、大筋の傾向として理解するのは差し支えないでしょう。表中の数値は日本語がカバー率の低い言語であることを物語っています。日本語の単語の多くが、具体的なものや個物を指す方面に多く分布しているからだと考えられます。このような個物志向・特定場面志向は「お方 方 お人 人 人物 人間 者」のような名詞、やりもらいの7動詞、「ころり ころん ころころ ころっ...」などの擬態語の使い分けに現れています。個々の場面・関係・状況に密着した表現を好む日本人の表現態度が見られます。抽象度の高い表現を選ぶフランス語と好対照になるのもうなずけるところです。「日本語能力試験」の1級の認定基準に「語彙(10,000語程度)を習得し」とあるのは、日本語の実態に即しているわけです。

教育的には、統計に基づいて作成された教育基本語彙などを活用することが効果的でしょう。

4. 語の形

「パパイヤ」という果物があります。この名を聞いた日本人は、即座に日本の果物ではないと判断します。固有の日本語の単語(和語)には音素Pが語頭に現れることが極端に少ないのに、さらにPが後続するため、擬音語・擬態語・俗語でなければ、和語ではないと直覚できます。和語には、

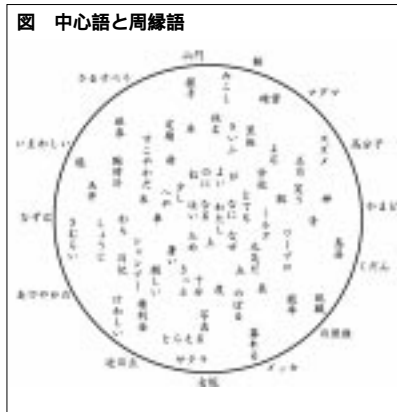
- (1)語頭に撥音「ん」が現れない
- (2)語頭に濁音・半濁音P・ラ行音が現れることが少ない。それらの連続はたいへん稀である
- (3)エ段の連続は少ないなどの特徴があります。

現代日本語の和語名詞としては、2拍で「かり」(雁・狩りなど) 3拍で「かかり」(掛かり・係り)が最も日本語らしい語形となります。4拍の和語副詞には、A W B I の型になるものがかなりあります。第3拍のBの子音は、第2拍が促音(ッ)か撥音(ン)かによって変わります。どんな関係になるか、考えてみて下さい。

5. 語彙の教育

人間は獲得したすべての語を同率に使っているわけではありません。仕事や好みによって外来語をよく使う人、新語をきらう人など、まちまちです。しかし、大量の言語資料を計量的に分析してみると、個人の使用や立場を越えた、その言語全体の姿が見えてきます。最もよく使われる語の代表を中心に並べて、その周りに順に使用率の低い語の代表を並べてみましょう。

円の中心部に書かれている語は、いわば初級用の最も基本的なグループです。中心から遠い位置にある語ほど、学習段階が進んだ場合の教授語彙です。円周外の語は上級またはそれ以上の特殊専門語の代表と言えるでしょう。



教授者は、同時に教えるべき語のセットについて熟知していなければなりません。「父」「母」「春」「夏」「秋」「冬」「病気」「熱」「薬」「病院」「お医者さん」などです。これらは共起語の一部でもあります。また、中級以上では、「とうとう」と「やっと」、「から」と「ので」など、語の意味・用法について正しい知識を与える必要が出てきます。

語の意味については、素性(features)に分けて考える方法や共起語(いっしょに使われる語)に着目して分析する方法などがあります。さらに反義・類義などの関係や意味変化のタイプに関する知識も、研究・教育にとっては欠かせない重要なものです。

語彙の研究は、身近な事項に関していますから、だれにも手がけやすいものです。積極的に取り組まれることを期待します。

参考文献

国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
 国立国語研究所 (1984) 『分類語彙表』秀英出版
 国立国語研究所 (1984・85) 『語彙の研究と教育』(上・下)大蔵省印刷局
 玉村文郎編 (1989・90) 『日本語の語彙・意味』(上・下)明治書院
 金田一春彦他編 (1978) 『学研国語大辞典』学習研究社
 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
 森田良行 (1996) 『意味分析の方法』ひつじ書房